

# 重度・重複障がいのある児童生徒の 教育内容・指導方法の充実に関する研究

—AT・ICT 機器を活用した指導実践の提示を通して—

## 重度・重複障がいのある児童生徒の ICT 活用状況調査結果概要 《目次》

1 調査結果と分析	1
(1) 脳機能障がいの程度について	1
(2) 移動機能の発達段階について	1
(3) コミュニケーションについて	1
(4) 基本的な授業スタイルについて	3
(5) ICTを活用した教育の実施の有無について	4
(6) ICTを活用している／活用していない理由について	4
(7) ICTの活用に関する実施の規模について	5
(8) ICTを活用した教育に係る教員の能力について	5
(9) ICTを活用した授業や利用場面について	6
(10) 活用しているICT機器について	6
(11) ICT以外で活用している教材・教具について	7
(12) 重度・重複障がいのある実態を示すカテゴリーについて	8
2 調査についての考察	8
【参考資料】	
調査用紙及び回答用紙	10

平成 28 年 3 月  
岩手県立総合教育センター  
長期研修生  
所属校 岩手県立盛岡青松支援学校  
菊池直実

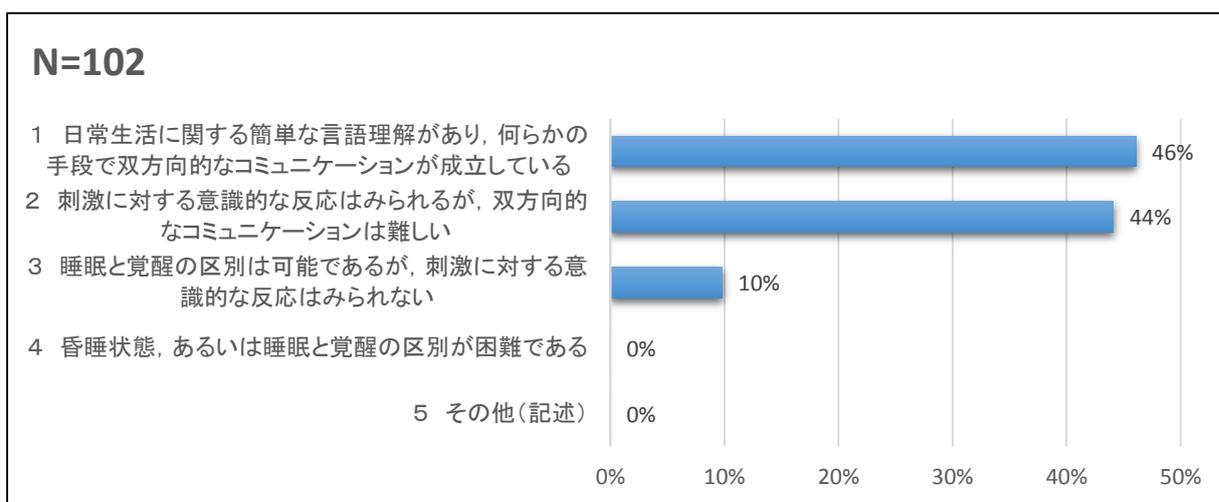
## 1 調査結果と分析

調査は、平成27年7月1日から、7月31日の31日間において実施した。岩手教育行政ネットワークを使用し、回答者が各校のフォルダに入力するという形式とした。

重度・重複障がいのある児童生徒の担任・副担任が児童生徒1名を抽出し、回答することとした。その際、担任と副担任で対象とする児童生徒が重複しないこととした。対象校11校より102名の回答が得られた。(図の構成比は端数処理のため、合計が100%とならない場合がある。)

### (1) 脳機能障がいの程度について (【図1】)

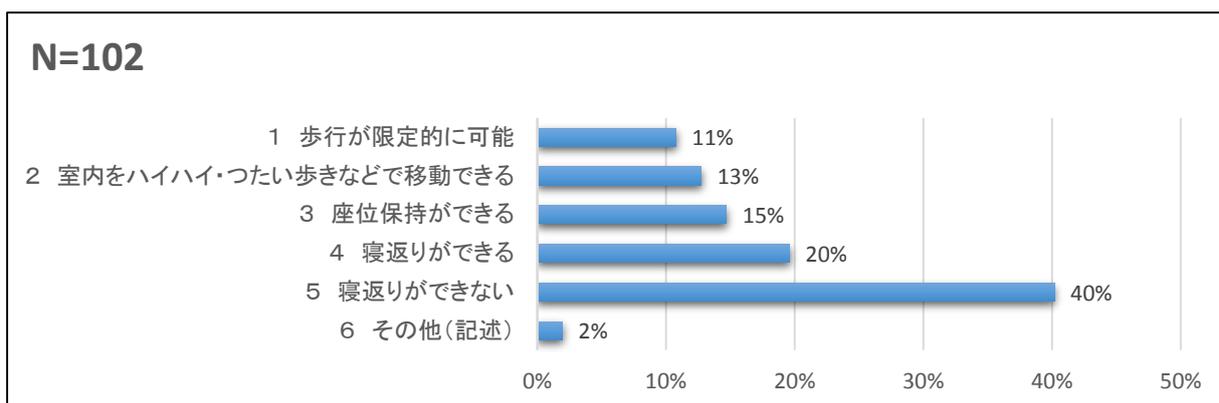
児童生徒の脳機能障がいの程度を4分類で回答を求め、「その他」については記述式とした。47名(46%)の児童生徒に双方向的なコミュニケーションが成立しており、残り55名(54%)がコミュニケーションに問題を抱えているという結果となった。



【図1】脳機能障がいの程度

### (2) 移動機能の発達段階について (【図2】)

移動機能の発達段階については、「寝返りができない」が41名(40%)と最も多い結果となった。県内の重度・重複障がいのある児童生徒の身体的機能の障がいの程度を読み取ることができる。



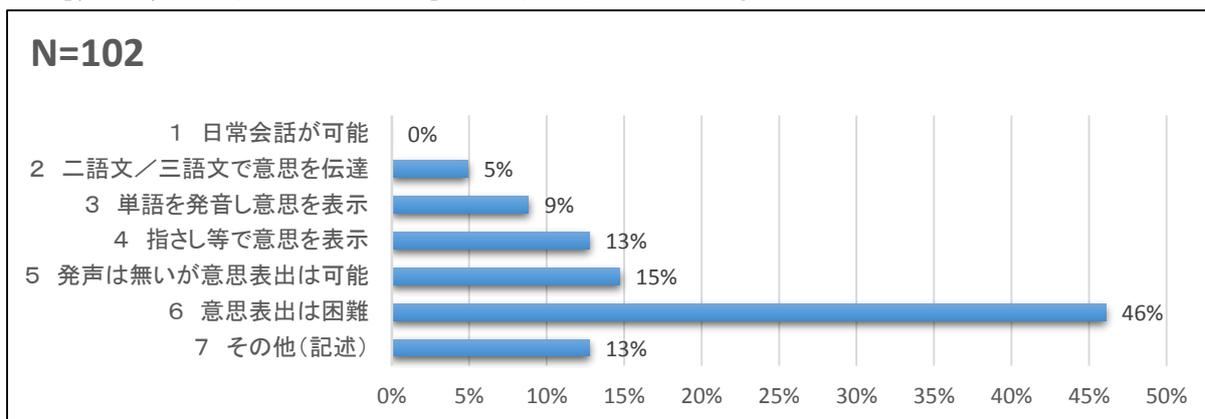
【図2】移動機能の発達段階

### (3) コミュニケーションについて

#### ア 全体の回答状況 (【図3】)

主なコミュニケーション手段についての質問においては、「意思表示は困難」の項目が47名(46%)と最も多く、現場の教員が児童生徒とのコミュニケーションにおいて困難を抱えていることが分かる。

「その他」の記述を見てみると、選択項目に「発声」による意思表示の項目がなかったため、「発声」に関連する内容が多く書かれていた。また、「表情や視線，顔を背ける等で意思を表出する」，「不快や拒否のみ表出する」という記述が見られた。

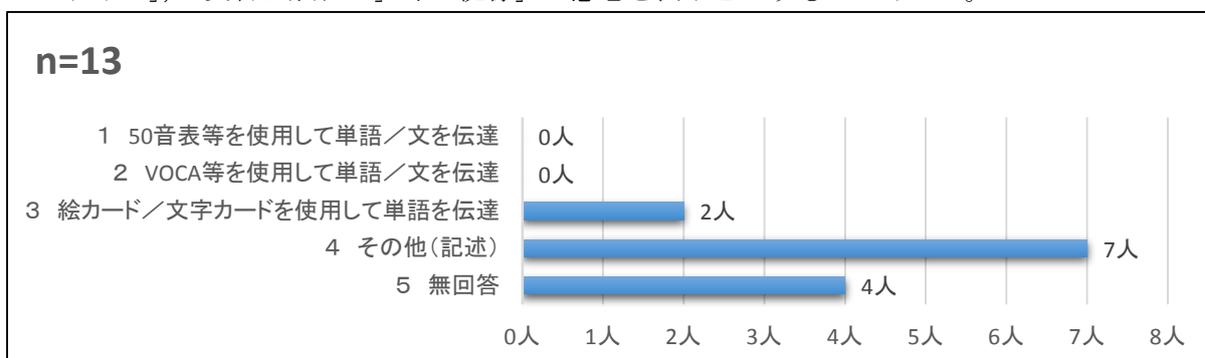


【図3】主なコミュニケーション手段

## イ 選択項目の回答状況

### (ア) 「指さし等で意思を表示」の詳細（【図4】）

13名が選択した「指さし等で意思を表示」を詳しく見ていくと、「絵カード/文字カードを使用して単語を伝達」している児童生徒は2名で、「50音表」や「VOCA」等を使用して自ら意思を表出している児童生徒はいなかった。最も多かった「その他」の内訳は、「マカトンサイン」や「オリジナルサイン」，「実物に触れて」や「視線」で意思を表示というものであった。



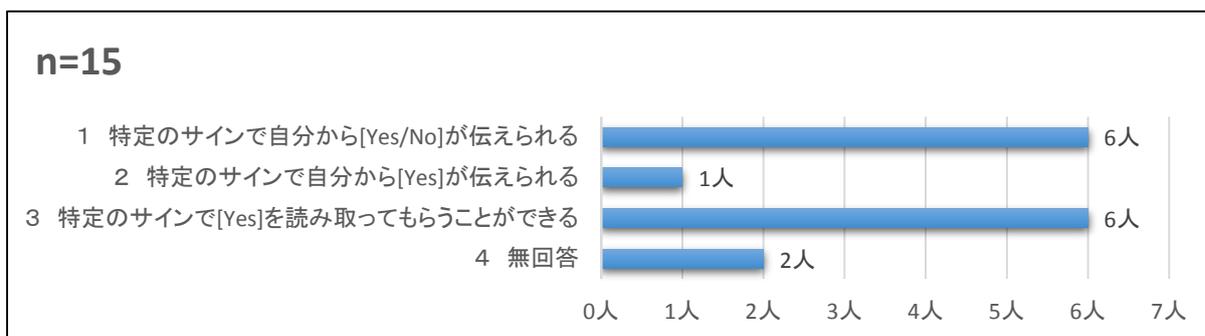
【図4】「指さし等で意思を表示」の詳細

### (イ) 「発声は無いが意思表示は可能」の詳細（次頁【図5】）

この質問では、選択と同時に具体的サインについての記述も求めた。

15名が選択した「発声は無いが意思表示は可能」の詳細は、「特定のサインで自分から[Yes/No]が伝えられる」と「特定のサインで[Yes]を読み取ってもらうことができる」を各6名が選択しており、発声以外の意思表示の手段をもつ児童生徒がいるということが推測できる。[Yes/No]を伝えられる児童生徒の具体的な[Yes]のサインには、「瞼の開閉」，「口の動き」，「注視」，「笑顔や快の表情」，「自分から手を伸ばす」等が挙げられ，[No]のサインには，「視線をそらす」，「不快の表情」，「手で物や人を押し返す」等が挙げられた。

読み取ってもらう[Yes]のサインには，「手を伸ばす」，「表情や視線等」，「手をタッチして合図する」，「手を重ねる」等の回答があった。

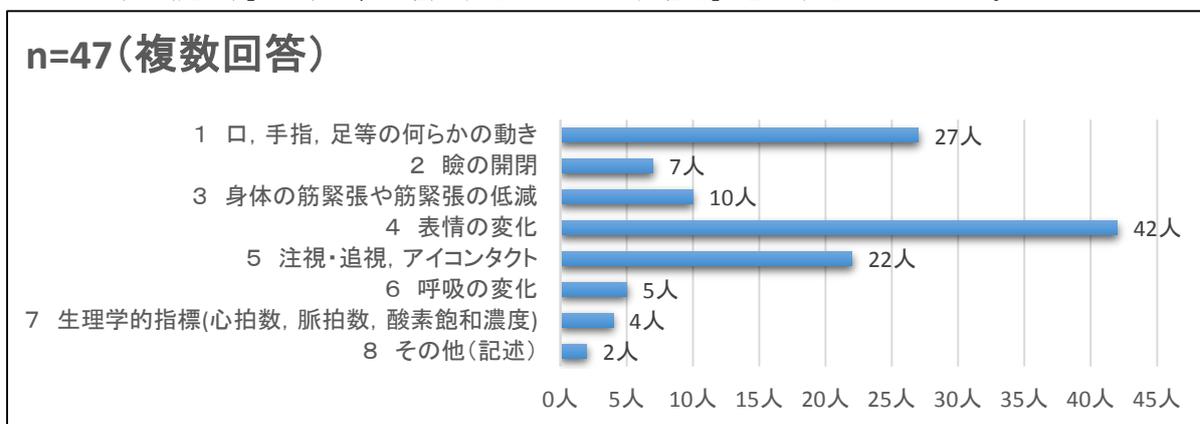


【図5】「発声は無いが意思表示は可能」の詳細

(ウ) 「意思を確認する手立て」の詳細 (【図6】)

選択肢は7つあり、手立てとしているものすべてを選択する形式である。最も多かったのは「表情の変化」42名であり、次いで「口、手指、足等の何らかの動き」27名、「注視・追視、アイコンタクト」22名であった。他に「呼吸の変化」5名と「生理学的指標」4名があり、これは児童生徒の障がい非常に重いゆえの手立てと推測される。

「その他 (記述)」2名は、「確認する手立ては未確定」というものであった。

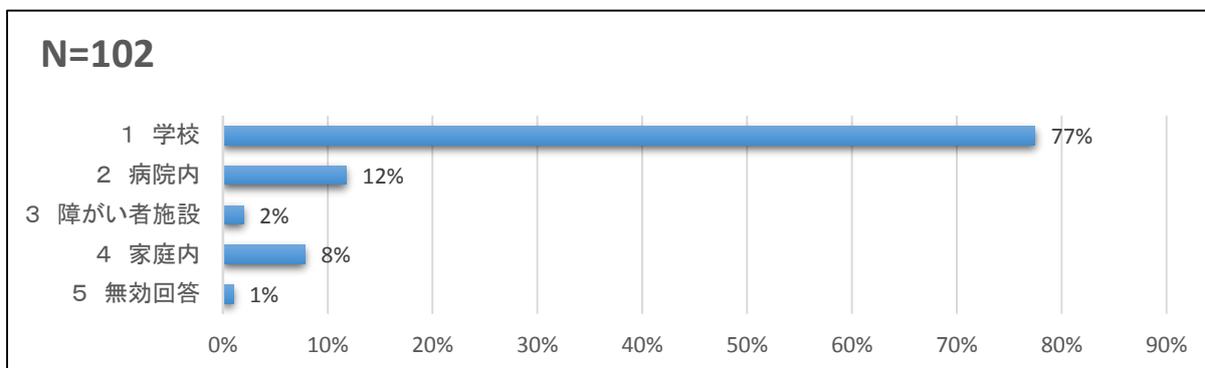


【図6】「意思を確認する手立て」の詳細

(4) 基本的な授業スタイルについて

ア 主な授業の場 (【図7】)

「学校」が79名(77%)と最も多く、学校以外で訪問授業を受けている児童生徒は22名で、全体の22%程度であった。

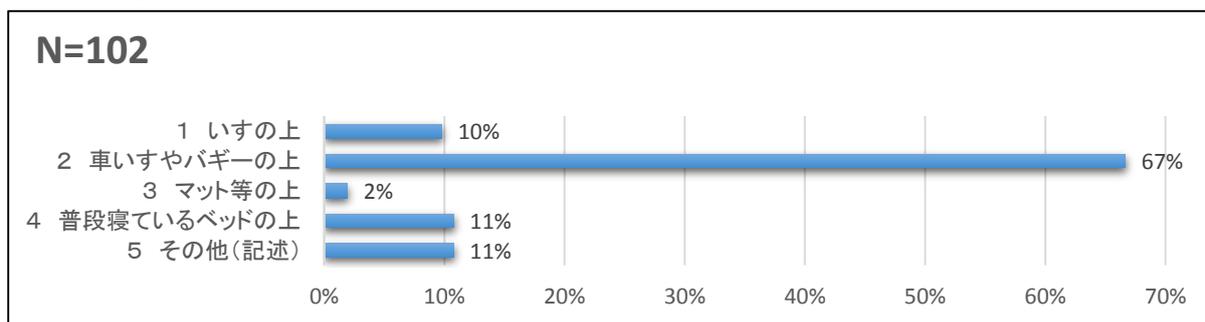


【図7】主な授業の場

イ 授業を受ける際の主な体勢 (次頁【図8】)

「車いすやバギーの上」が68名(67%)と最も多い結果であり、「いすの上」10名(10%)と児童生徒の実態に合わせた福祉用具の「クッションチェア」や「オルソチェア」、「姿勢保持

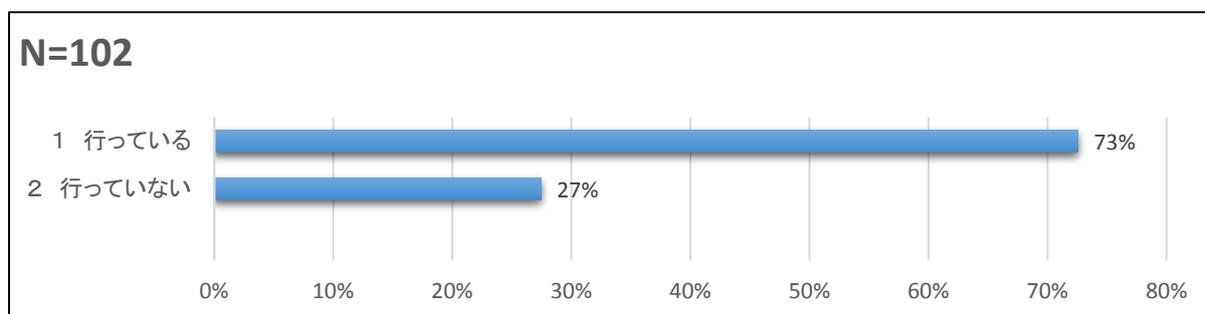
いす」といった内容の「その他」11名（11%）を含めると、89名（88%）の児童生徒が座位を保持できるということが分かった。



【図8】授業を受ける主な体勢

(5) ICTを活用した教育の実施の有無について（【図9】）

ICTを活用した教育を「行っている」と回答した教員は74名（73%）であり、7割を超える教員が実施している結果が得られた。

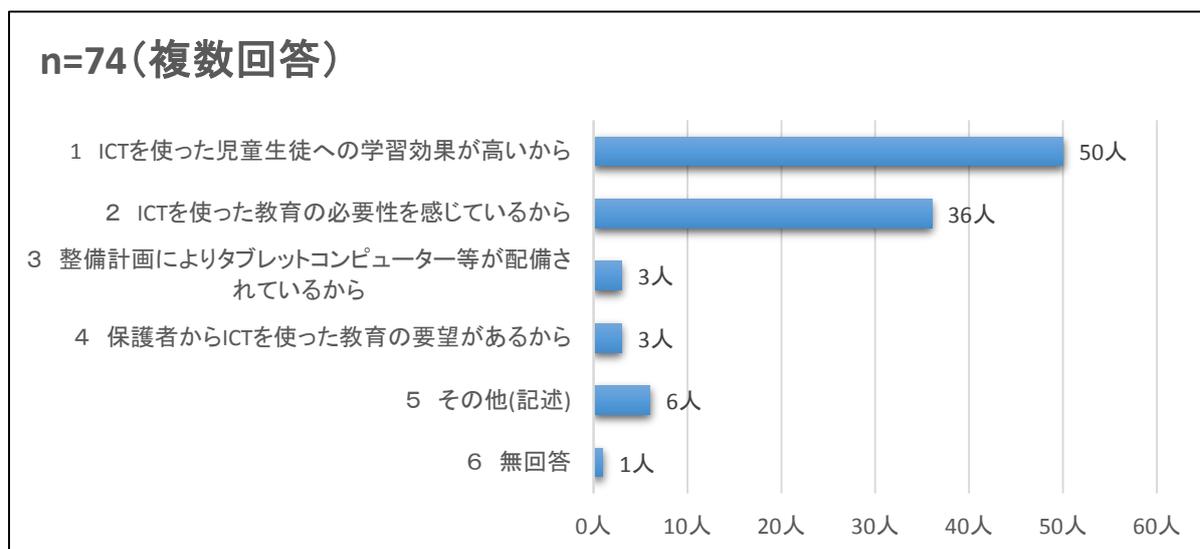


【図9】ICTを活用した教育の実施の有無

(6) ICTを活用している／活用していない理由について

ア ICTを活用している理由（【図10】）

「(5) ICTを活用した教育の実施の有無について」において「行っている」と回答した74名の回答状況は、「ICTを使った教育は児童生徒への学習効果が高いから」が50名と最も多く、次いで「ICTを使った教育の必要性を感じているから」が36名という結果となり、教員が学習効果をねらってICTを学習に取り入れていることが明らかになった。

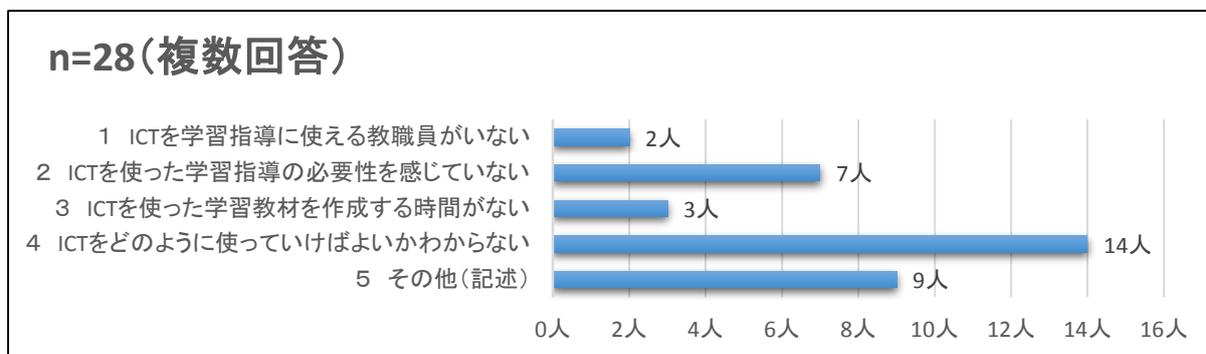


【図10】ICTを活用している理由

#### イ ICT を活用していない理由（【図 11】）

「(5) ICT を活用した教育の実施の有無について」において「行っていない」と回答した 28 名の回答状況は、「ICT をどのように使っていけばよいかわからない」が 14 名と最も多く、活用の仕方の情報が不足していると推測できる。「ICT を使った学習指導の必要性を感じていない」と回答した教員は 7 名であった。

「その他」は、記述の無い 2 名以外の全てが、「教材として自由に使える機器が導入されていないため」という物理的な理由を挙げており、導入後は活用していきたいという回答であった。

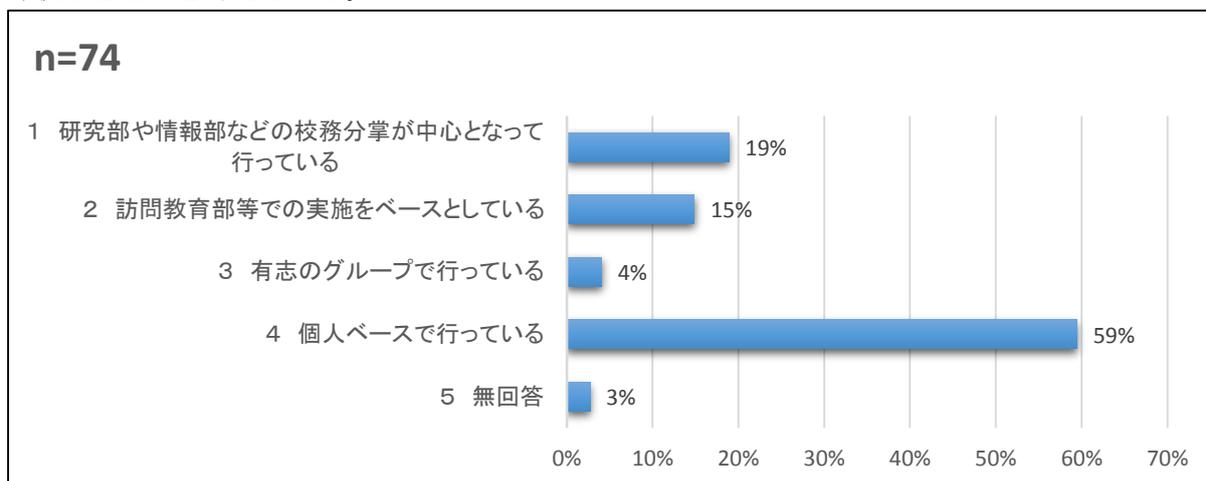


【図 11】 ICT を活用していない理由

※ 以下の (7) ~ (10) は「(5) ICT を活用した教育の実施の有無について」において ICT を活用した教育を「行っている」と回答した教員 74 名の回答状況である。

#### (7) ICT の活用に関する実施の規模について（【図 12】）

「個人ベースで行っている」が 44 名 (59%) と最も多く、「研究部や情報部などの校務分掌が中心となって行っている」は 14 名 (19%) に留まった。ICT の急速な普及に伴い、校内体制の整備は、今後進むものと考えられる。

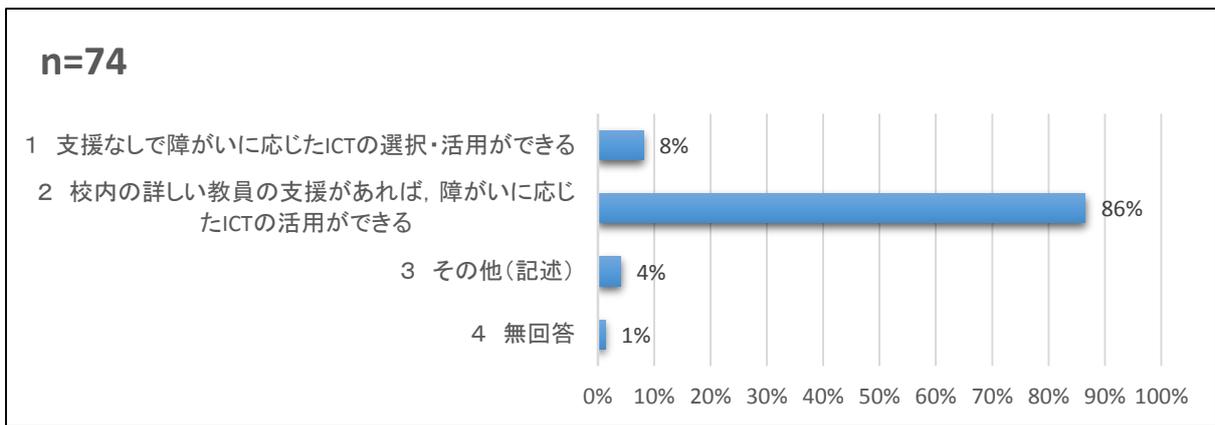


【図 12】 ICT の活用に関する実施の規模

#### (8) ICT を活用した教育に係る教員の能力について（次頁【図 13】）

「校内の詳しい教員の支援があれば、障がいに応じた ICT の活用ができる」が 64 名 (86%) という結果となり、「支援なしで障がいに応じた ICT の選択・活用ができる」と答えた教員は 6 名 (8%) に留まった。

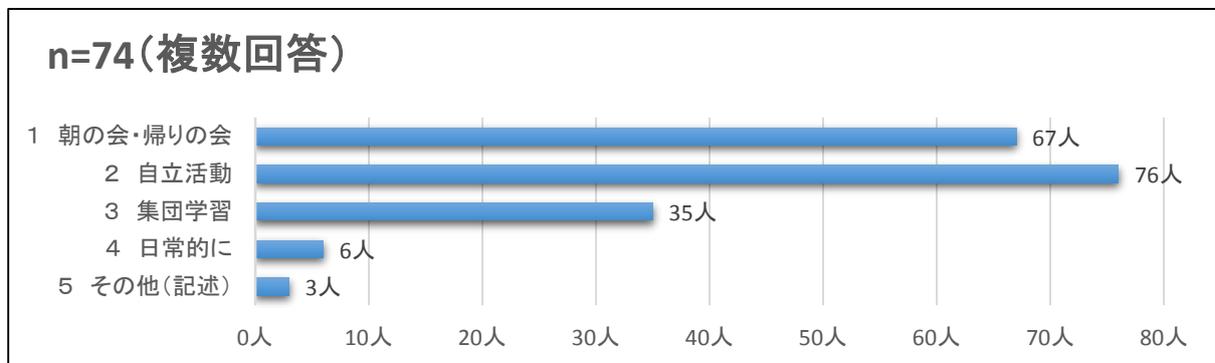
「その他」には、「ICT に対する知識、ICT の運搬、授業を行う環境を考えると難しい」、「各校にサポートして下さる機関があればよい」、「全面的に教員のサポートが必要」という記述があった。



【図 13】 ICT を活用した教育に係る教員の能力

(9) ICT を活用した授業や利用場面について (【図 14】)

最も多く活用されている場面は、「自立活動」の76名である。また、「朝の会・帰りの会」でもよく活用されていることが分かった。「日常的に」活用している児童生徒は6名に留まった。



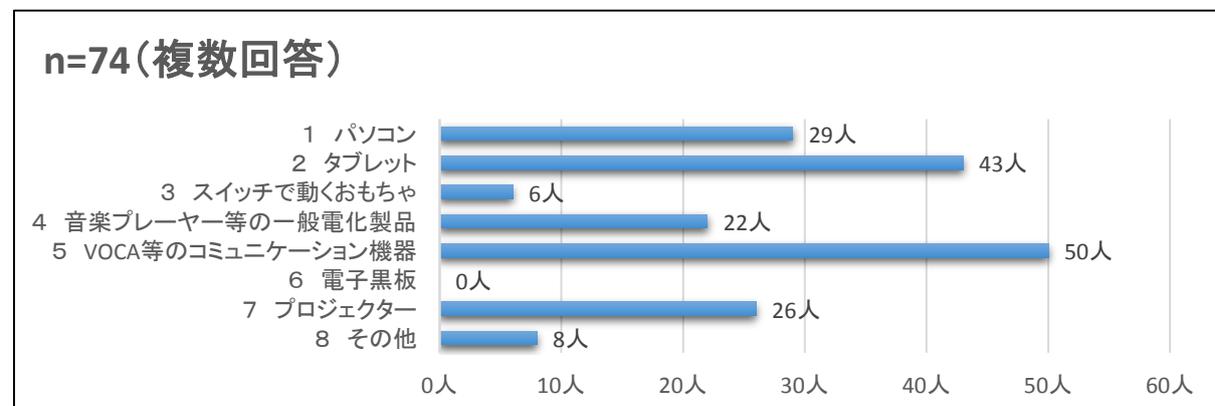
【図 14】 ICT を活用した授業や利用場面

(10) 活用している ICT 機器について

ア 活用している ICT 機器 (【図 15】)

最も活用されている ICT 機器は、50名が選択した「VOCA等のコミュニケーション機器」であった。「タブレット」は43名、「パソコン」は29名という結果であった。

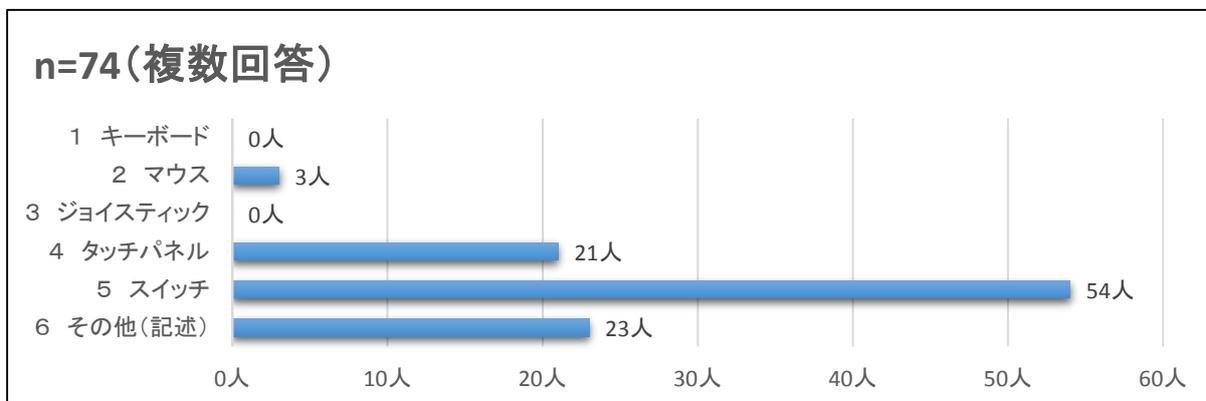
「その他」8名の内訳は、「打楽器叩き装置」2名、「スマートフォン」2名、「ボイスレコーダー」1名、「スイッチ対応学習型赤外線リモコン」1名、「リモコンコンセント」1名、「アイトーク」1名であった。



【図 15】 活用している ICT 機器

イ 児童生徒が機器を操作するもの(AT) (【図 16】)

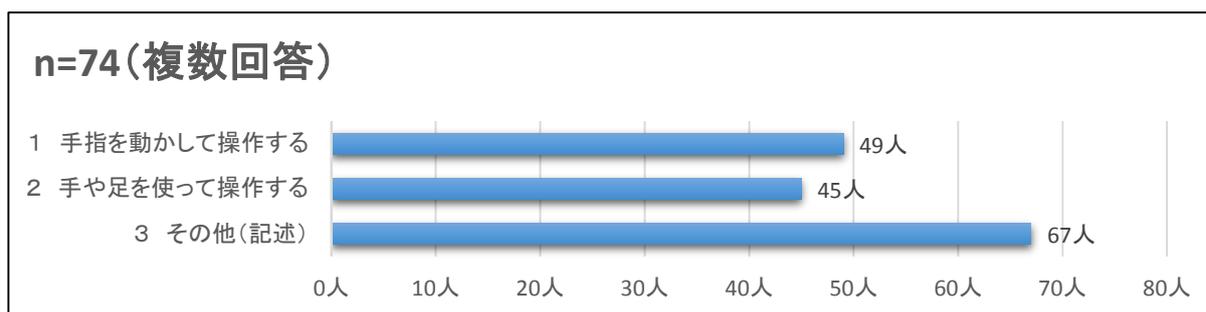
「スイッチ」を使用している児童生徒が 54 名と最も多く、「タッチパネル」21 名 は全てがタブレットを直接操作するものであった。「マウス」を使用している児童生徒は 3 名に留まった。「その他」は、「iPad タッチャー」や「VOCA」, 「電化製品」を直接操作するものであった。



【図 16】 児童生徒が機器を操作するもの (AT)

ウ 児童生徒の操作方法 (【図 17】)

「その他」(67 名) が「手指を動かして操作する」(49 名), 「手や足を使って操作する」(45 名) を上回る結果となった。「その他」は, 「教師が児童生徒の手を取って操作する」, 「児童生徒の手の動きに合わせて教師がスイッチを移動する」など, 教師が操作する内容であった。

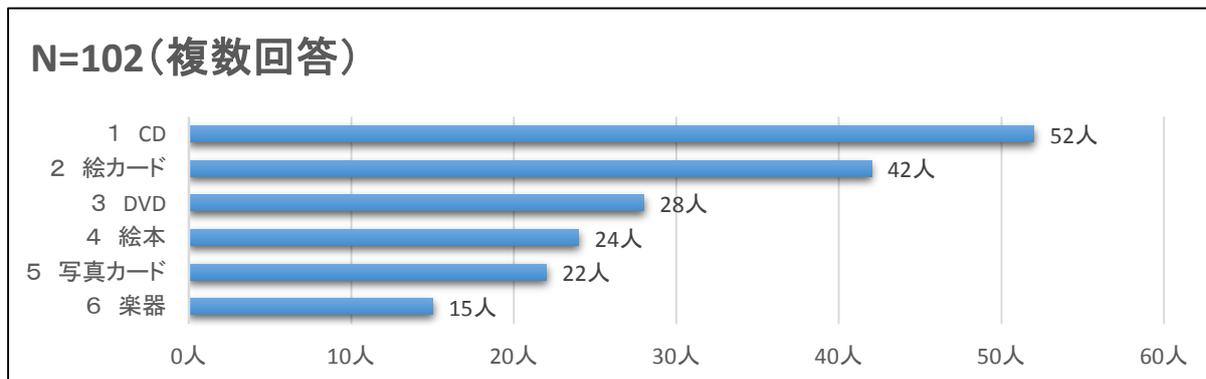


【図 17】 児童生徒の操作方法

(11) ICT 以外で活用している教材・教具について (【図 18】)

ICT を活用しているか否かにかかわらず, 全ての教員に対して ICT 以外で活用している教材・教具について質問したところ, 上位の結果は, CD (52 名), 絵カード (42 名) となった。

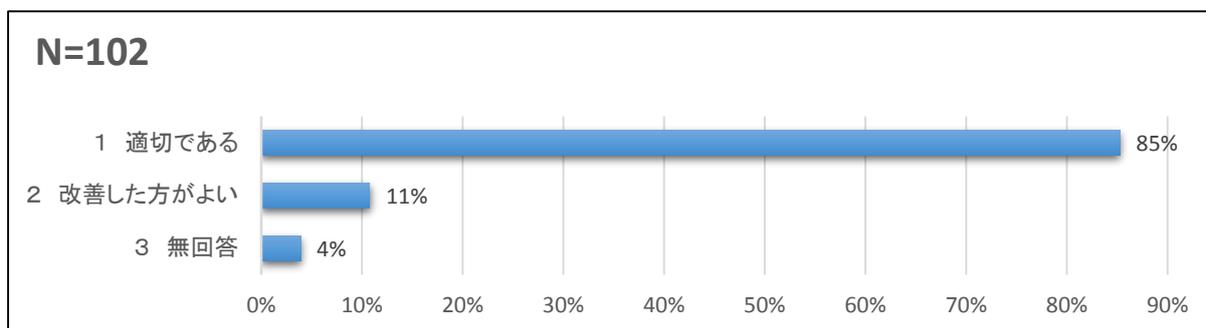
この結果より, 自立活動の学習において, 音楽的活動, コミュニケーション学習, DVD や絵本等の物語に触れる学習が多く行なわれていることが推測できる。



【図 18】 活用している ICT 以外の教材・教具

(12) 重度・重複障がいのある児童生徒の実態を示すカテゴリについて (【図 19】)

重度・重複障がいのある児童生徒の実態に応じて、アプリや機器の選択ができるように、児童生徒の実態をカテゴリ分けすることは適切かどうかについて意見を求めたところ、「適切である」が 87 名 (85%)、「改善した方がよい」が 11 名 (11%) という結果となった。



【図 19】 重度・重複障がいのある児童生徒の実態を示すカテゴリ

「改善した方がよい」では、提案したカテゴリに当てはまらない児童生徒がいるという意見が多かった。また、「コミュニケーション」の捉えをどう考えるか、「コミュニケーション」と「認知力・操作面」を組み合わせるカテゴリに分けることは難しいという意見があった。【資料 1】に「改善に対する主な意見」をまとめた。

【資料 1】 改善に対する主な意見

- [コミュニケーションの捉えについて]
  - ・コミュニケーションの捉え方をどう考えるか。言語理解がなくても双方向的なコミュニケーションは可能なのではないか。
  - ・コミュニケーションの段階的な捉え方と、認知力・操作面を含み捉えるのは難しい。
- [カテゴリの構成要素について]
  - ・重度の児童生徒ほど、反応の読み取りが困難である。意識的反応なのか、生理的な反応（偶発的なもの）なのかの判断が難しい。その場合の、カテゴリを挿入した方が良いと思う。
  - ・随意運動が安定していない生徒のカテゴリが必要。
  - ・手指の動きで完全にできるわけでもなく、完全にできないわけでもない「未満」の場合の表記や取組が示されるとよい。
  - ・言語理解の程度を 2～3 段階（例えば…「ことば」の理解ができるか否か、数がわかるか否か等）に分けると、アプリが選びやすいと思う。
  - ・コミュニケーションと動きの有無だけで、カテゴリライズして良いとは思えない。

## 2 調査結果の考察

### (1) 児童生徒の実態

重度・重複障がいのある児童生徒の半数以上が、コミュニケーションにおいて、意思表示の困難さを抱えていることが分かった。授業を受ける主な体勢は、その他の福祉用具のいずれも含めると、8割以上の児童生徒が座位を保持することができ、6割以上の児童生徒が車やバギーを使用していることが分かった。

これらから、重度・重複障がいのある児童生徒の ICT 機器の活用の仕方として、コミュニケーションの補助や意思表示に活用することが有効ではないかと考えられる。その際、携帯型の端末を車いすやバギーに固定具して使用するスタイルが想定できる。さらに、直感的に操作が可能で教育分野のアプリが豊富な iPad の活用の仕方、コミュニケーション補助となるアプリ、AT(入力装置)、固定具等の情報が必要であることが分かった。

## (2) ICT活用の状況

ICTを活用した教育を行っているという回答した教員は7割以上という結果であるが、7頁【図17】の「その他」の記述を見ると、ICT機器を操作しているのは教員という回答が目立った。

最も多く使われているICT機器は、6頁【図15】よりVOCA等のコミュニケーション機器であり、重度・重複障がいのある児童生徒の教育にはコミュニケーションにかかわる指導が多く行われていることが分かった。しかし、2頁【図4】において、VOCA等を使用して自ら意思を表出している児童生徒はならず、日常的に活用することが難しい状況であることが推測される。

タブレットを活用していると答えた人数がパソコンを活用していると答えた人数を上回っており、重度・重複障がいのある児童生徒の教育にタブレットが普及しつつあることが分かる。

これらのことより、今後、重度・重複障がいのある児童生徒がICT機器を操作するために必要なAT（スイッチやインターフェース）、VOCA専用機器に代わるタブレットのアプリ等の情報が必要となるであろう。

## (3) 児童生徒の実態を示すカテゴリーについて

児童生徒の実態をカテゴリーに分けることは、8頁【図19】により「適切である」（85%）との回答を得たが、コミュニケーションと認知力、操作能力を総合してカテゴリーに分けることは難しいという意見が出されたことを受け、重度・重複障がいのある児童生徒を、ある程度の身体的機能で区分することは可能であるものの、これらを併せたカテゴリーを設定することは難しいと判断した。

【参考資料】 ー 調査用紙及び回答用紙 ー (以下 16 頁まで)

## 質問紙

### 重度・重複障がいのある児童生徒の ICT 活用状況調査

重度・重複障がいのある児童生徒を担当されている担任・副担任の先生に、担当する児童生徒各 1 名についてお尋ねします。児童生徒の抽出については、実施要項の「2 調査対象」の観点から選出してください。

- 1 学校名
- 2 学部・学年・年齢
- 3 障がい名(わかる範囲で)
- 4 脳機能障がいの程度について当てはまる項目を 1 つ選び、回答欄に入力してください。
  - ア 日常生活に関する簡単な言語理解があり、何らかの手段(動作、表情、支援機器等の活用等)で双方向的なコミュニケーションが成立している
  - イ 刺激に対する意識的な反応はみられるが、双方向的なコミュニケーションは難しい
  - ウ 睡眠と覚醒の区別は可能であるが、刺激に対する意識的な反応はみられない
  - エ 昏睡状態、あるいは睡眠と覚醒の区別が困難である
  - オ その他(記述)
- 5 移動機能の発達段階について、当てはまる項目を 1 つ選び、回答欄に入力してください。
  - ア 歩行が限定的に可能
  - イ 室内をハイハイ・つたい歩きなどで移動できる
  - ウ 座位保持ができる
  - エ 寝返りができる
  - オ 寝返りができない
  - カ その他(記述)
- 6 主なコミュニケーション手段について、当てはまる項目を 1 つ選び、回答欄に入力してください。
  - ア 日常会話が可能
  - イ 二語文／三語文で意思を伝達
  - ウ 単語を発音し意思を伝達
  - エ 指さし等で意思を表示
    - エ - ①50 音表等を使用して単語／文を伝達
    - エ - ②VOCA 等を使用して単語／文を伝達
  - ※Voice Output Communication Aid(音声言語を表出できない人が、絵や写真を選択し、押すことにより音声を出力するコミュニケーション機器)
  - エ - ③絵カード／文字カードを使用して単語を伝達
  - エ - ④その他(記述)

オ 発声は無いが意思表示は可能（具体的サインについてご入力ください。）

オ - ①特定のサインで自分から「Yes/No」が伝えられる

・ Yes の場合：(サインの記述)

・ No の場合：(サインの記述)

オ - ②特定のサインで自分から Yes が伝えられる

・ Yes の場合：(サインの記述)

オ - ③特定のサインで「Yes」を読み取ってもらうことができる

・ Yes の場合：(サインの記述)

カ 意思表示は困難

キ その他（記述）

**\* 「カ」以外を選ばれた方は 8 へお進みください。**

**\* 6 の「カ」を選ばれた方にお尋ねします。**

7 意思表示が困難な場合、意思を確認する手立てとしてしていることにはどのようなものがありますか。

該当する項目を選び、回答欄に入力してください。（複数回答可）

ア 口、手指、足等の何らかの動き

イ 瞼の開閉

ウ 身体の筋緊張や筋緊張の低減

エ 表情の変化（笑顔や不快な表情、注意を集中している表情等）

オ 注視・追視、アイコンタクト

カ 呼吸の変化

キ 生理学的指標（心拍数、脈拍数、酸素飽和濃度）

ク その他（記述）

**\* 全ての方にお尋ねします。**

8 主な授業の場について、該当する項目 1 つを選び、回答欄に入力してください。

ア 学校

イ 病院内

ウ 障がい者施設内

エ 家庭内

オ その他（記述）

9 児童生徒が運動以外の授業を受ける主な体勢について、該当する項目を 1 つ選び、回答欄に入力してください。

ア いすの上

イ 車いすやバギーの上

ウ マット等の上

エ 普段寝ているベッドの上

オ その他（記述）

重度・重複障がいのある児童生徒を担当されている先生に、ICT を活用した教育についてお尋ねします。

10 重度・重複障がいのある児童生徒への ICT を活用した教育を行っていますか。

- ア はい
- イ いいえ

\* 「はい」の場合



11, 12, 13, 14, 16, 17 についてお答えください。

\* 「いいえ」の場合



15, 16, 17 についてお答えください。

**\* 10 で「はい」を選ばれた方にお尋ねします。**

11 ICT の活用に関する実践の規模について、当てはまる項目を 1 つ選び、回答欄に入力してください。

- ア 研究部/情報部などの校務分掌があり、そこが中心となっている
- イ 訪問教育部等での実施をベースとしている
- ウ 有志のグループで
- エ 個人ベースで

12 ICT を活用している理由について、該当する項目を選び、回答欄に入力してください。（複数回答可）

- ア ICT を使った児童生徒への学習効果が高いから
- イ ICT を使った教育の必要性を感じているから
- ウ 整備計画によりタブレットコンピュータ等が配備されているから
- エ 保護者から ICT を使った教育の要望があるから
- オ その他（記述）

13 児童生徒の障がいに応じた ICT 活用について、回答者ができる項目を選び、回答欄に入力してください。

- ア 支援なしで障がいに応じた ICT の選択・活用ができる
- イ 校内の詳しい教員の支援があれば、障がいに応じた ICT の活用ができる
- ウ その他（記述）

14 ICT を活用した授業や活用場面についてお尋ねします。次の例を参考に回答欄に入力してください。  
 なお、活用場面、活用している機器・ソフトウェア・アプリ等、児童生徒が機器を操作する際に使用するもの、操作する方法について、当てはまる項目をお選びください。回答欄は必要に応じて増やしたり広げたりしてかまいません。

【活用場面】 \_\_\_\_\_  
 ①朝の会・帰りの会    ②自立活動    ③集団学習    ④日常的に    ⑤その他（記述）

【機器】 \_\_\_\_\_  
 ⑥パソコン（ソフトウェア等の名称）    ⑦タブレット（アプリ等の名称）  
 ⑧スイッチで動くおもちゃ    ⑨音楽プレーヤー等の一般電化製品  
 ⑩VOCA 等のコミュニケーション機器    ⑪電子黒板    ⑫プロジェクター  
 ⑬その他（記述）

【ソフトウェア・アプリ等】 \_\_\_\_\_  
 記述

【使用するもの】 \_\_\_\_\_  
 ⑭キーボード    ⑮マウス    ⑯ジョイスティック    ⑰タッチパネル  
 ⑱スイッチ（名称）    ⑲その他（記述）

【操作方法】 \_\_\_\_\_  
 ⑳手指を動かして操作する    ㉑手や足を使って操作する    ㉒その他（記述）

<例>

活用場面	活用している機器・ソフトウェア・アプリ等	児童生徒が使用するもの	操作する方法	内容・目的
①	⑦ カメラアプリ		㉒ 教師が操作	iPad で撮影した写真を見て外の様子や天気を確認する。
②, ③	⑥ パワーポイント ⑫	⑱ センサースイッチ	㉒ 口元を動かす	パワーポイントの画像を児童生徒がスイッチで送り，集団で鑑賞する。
②	⑨ ミキサー ⑬ ラッチ&タイマー	⑱ 押し型スイッチ	㉑	児童生徒によりミキサーのスイッチを入電しジュースを作る。

**\* 16 へお進みください。**

**\*10で「いいえ」を選ばれた方にお尋ねします。**

15 ICT を活用していない理由について、当てはまる項目を選び、回答欄に入力してください。

(複数回答可)

- ア ICT を学習指導に使える教職員がいない
- イ ICT を使った学習指導の必要性を感じていない
- ウ ICT を使った学習教材を作成する時間がない
- エ ICT をどのように使っていけばよいかわからない
- オ その他 (記述)

**\*全ての方にお尋ねします。**

16 重度・重複障がいのある児童生徒に指導を行う上で、ICT 以外の活用されている教材・教具についてお尋ねします。次の例を参考に回答欄に入力してください。なお、活用場面について、当てはまる項目をお選びください。表は必要に応じて増やしたり広げたりしてかまいません。

【活用場面】

- ①朝の会・帰りの会    ②自立活動    ③集団学習    ④日常的に    ⑤その他 (記述)

<例>

活用場面	活用している教材・教具	目的
②, ③	ペーパーサート	物語の鑑賞
②	CD, DVD	音楽・物語の鑑賞
④	絵カード	コミュニケーション

17 教育センターでは、重度・重複障がいのある児童生徒の実態に応じて、アプリケーションや機器の選択ができるように研究を進めています。次に挙げる児童生徒の実態を示すカテゴリが適切かどうかについて、当てはまる項目を選び、回答欄に入力してください。また、ご意見をご自由にお書きください。(別紙参照)

**(1) 児童生徒が活用する場合**

- 言語理解があり、何らかの手段で双方向的なコミュニケーションが成立している
  - a. 手指を動かすことができる (タップができる)
  - b. 手足を動かすことができる
  - c. 上記以外の部位を動かすことができる
- 刺激に対する意識的な反応はみられるが、双方向的なコミュニケーションは難しい
  - a. 手足を動かすことができる
  - b. 手足以外を動かすことができる
- 意識的な反応はみられない

**(2) 教師が活用する場合**

- 児童生徒とのコミュニケーションが成立している
- 児童生徒の意識的な反応はみられるが、コミュニケーションは難しい
- 児童生徒の意識的な反応はみられない

- ア 適切である
- イ 改善した方がよい →ご意見をお願いします。

**アンケートは以上です。ご協力いただきありがとうございました。**

## 回答用紙

番号	質問項目	回 答		
1	学校名			
2	学部・学年・年齢	学部	年	歳
3	障がい名(分かる範囲で)			
4	脳機能障がいの程度	記号を記入		
		その他(記述)		
5	移動機能の発達段階	記号を記入		
		その他(記述)		
6	コミュニケーション	記号を記入		
		Yes/Noのサイン その他(記述)		
* 6で「カ」を選ばれた先生がご入力ください。				
7	意思を確認する手立て	記号を記入		
		その他(記述)		
* 全ての先生方がご入力ください。				
8	主な授業の場	記号を記入		
		その他(記述)		
9	授業を受ける体勢	記号を記入		
		その他(記述)		
* 10で「はい」を選ばれた先生がご入力ください。				
10	ICTを活用した教育の有無	記号を記入		
11	ICTの活用に関する実践の規模	記号を記入		
12	ICTを活用している理由	記号を記入		
		その他(記述)		
13	ICT活用についてできること	記号を記入		
		その他(記述)		

番号	質問項目			回答			
	活用場面	活用している機器・ソフトウェア・アプリ等		児童・生徒が使用するもの	操作方法	内容・目的	
14	番号/その他	番号	名称/その他	番号	名称/その他	番号/その他	記述
* 10で「いいえ」を選ばれた先生がご入力ください。							
15	ICTを活用していない理由			記号を記入			
				その他(記述)			
* 全ての先生方がご入力ください。							
16	活用場面(番号)			活用している教材・教具(記述)		目的(記述)	
17	実態を示すカテゴリー			記号を記入			
				改善へのご意見			